

# 海外記者リポート

## ウィーン

オペラの主役に日本人の中島彰子さん(右)が



が新風を巻き起こすために欠かせない存在なのだ。

「異質なものをどう受け入れるのか」という問いは、実はオーストリアという国そのものにも向けられている。

ベルリンの壁の崩壊後、東欧から多くの移民が流れ込んできた。十月の総選挙では、外国人移民の制限を唱える極右政党・自由党が議会第二位の勢力に躍進。外国メディアが「外国人嫌い」の風土を批判する例も出始めた。

生活者の実感として言えば、「外国人嫌い」批判に思いついたるフシもある。しかし、

中島さんは「ことオペラの世界では、オーストリアなどドイツ語圏の国は他のどの地域よりも実力本位で開放的。だから高い質が保てる」と話す。音楽界が社会の変化を先取りしているとすれば、この国の保守的なイメージもいずれ大きく変わるだろう。

(ウィーン＝平野登志雄)

## 音楽の都に新しい風 異質さ受け入れ問う

ンタード紙)と高い評価だ。ウィーンの音楽界は保守的と評される。作品の解釈や演出の好みだけではない。ウィーン・フィルには「オーストリア国籍を持つ男性」に楽団員を限定する不文律があると

も新しい風が吹き始めた。

今年九月にフォルクスオペラの芸術監督に就任したドミニク・メンタ氏はインスブルック歌劇場の総裁時代、前衛的なオペラ演出で高い評価を得た人物。ウィーンに招かれたのも、大胆な改革を通して

伝統の殻を破り、ファン層を広げる役割を期待されたのだから。中島さんは、同じ

切れない面があったようだ。しかし、そんな音楽の都に

元マスコミも「非の打ち所のない美声を披露した」(スタ

ウィーンでのフォルクスオペラで十三日、一人の日本人ソプラノ歌手がスターの座に駆け上がった。今シーズンの目玉として初演したレハール作「ロシア皇太子」で主役を演じた中島彰子さんだ。

伝統ある同劇場で日本人の主役は初めて。目の肥えた観客がどんな反応を見せるか知りたくて劇場に足を運んだ。彼女が一曲歌うごとに割れんばかりの拍手が鳴り響く。地元マスコミも「非の打ち所のない美声を披露した」(スタ